

天理大学附属天理図書館蔵 大隈言道『続草徑集』翻刻と解題（四）

進藤，康子
九州情報大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/25276>

出版情報：文献探究. 49, pp.26-47, 2011-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

大隈言道『続草径集』翻刻と解題(四)

進藤康子

958 月かけにかゝる雲をもたわすれて庭のこのはを払ふさよかせ

959 庭のおもにゆきまとひたる人の影そらよりみたるよすからの月

960 まとの戸の一重のかみも無はかり月あかきよは人もねられす

961 吹かへぬ風のみふきてさくらはなけふもそなたへちる日なりけり

962 吹風のものくるひなる【ホドけを】しらてまかする花にいかてしらせむ

963 あらたちてわかゝとたく風のうちにまこと問たる【ホドあのうれしな

964 のとかなる春のみそらになりくゝて桃も富たるこのみ也けり

965 よひくゝにいくつうつやとねきめしてかそへつゝ鼓みは更にける哉

966 人ことにをらまくほしきおもふりにせむすへなきは【さくら主】なりけり

967 終夜ものをおもひてはてなきにいとほしけなる犬の長鳴

968 いとおそし月をかくせるそらの雲ひろはかりをはいく夜にか行

969 さかりとてわかる花のかたはらにいつよりきたる雨風のくも

970 わかゝとはたに生たるすはりかふ居もならはす【てや】しいまたをさなき

971 けしきよく月をかくさぬ雨ならばそなたにしてもふらせてしかな
カク

972 よるなみのあさゝをしりて立もせずみなはのうちにあるちとりかな

973 よもすからむるゝ蚊わひてうまやとのあおと聞はわれもねられす

974 かゝらてはならしとおもふ事もなくありのまゝにて在わか世哉

975 ともとなくへもなく舟トのなから川なかるまゝのわかみなりけり

976 いかはかり花をさかせはわかやとにちりかひくもるにはをみるべき

977 さくらはなふち山吹とかそふれは春にのこるはわか身のみして

978 けふのみとおもへる時にくはゝれる春しもあらはいかにうれしき

979 さみたれはいへをいている人もな【く】回シこゆるは水にそありける

980 えたゝれてぬるゝはかりのまつ杉のこゝろはしりぬ五月雨の空

981 たゝひとつこのまに見ゆる舟下たにもかけなつかしきさみたれのこゝろ

982 さみたれはくものうちなる瀧つせに山もくつるゝ音のする哉

983 うゑし田のいねのはすゑの見えくれは誰もうれしきさみたれの空

984 おもひつるものみなうれしはるの野のにはつくゝしそこはさはらひ
(四一・才)

985 はなちれはそなたをはるの行へにて外には道のいつれともなき

986 としゝにをらるゝ梅の枝も老ておのかひもちお吾生にけり

987 いつしかもとのさくらになるならんちからなける数のひこはえ

988 うのはなのましろき垣にかけしるしこよひなくへき子規かも

989 ほととぎすはつねきかせよさしもあらは今よりのちは己か随意

990 人きけとなくにあらねは子規まちへぬへきかかたくもある哉

991 ほととぎすなかななきねと任せてはほこるゝやなけにならまし

- 992 またれてはほごりてなかぬ子規人のこころにたるものかな
- 993 をちかたにかけ見えきぬる子規今もなくねのきこえこましな
- 994 わかやとにまちもあへすて子規やかてよそなる子規かな
- 995 しのひねとおもひしこゑの子規ちかつくまゝにまさたなる哉
- 996 わかやとをとくも過れと子規月日の行はさはかりはなし
- 997 ほととぎすつれなしなとらむれとさるころこそ人におほけれ
- 998 子規かすくおほきこゑのうちにはつこゑ計はなくはましらす
(四一・ウ)「
- 999 ナ
まけたるもいとくかたきを子規ありあけの月に見るつかひかな
- 1000 まてはなくときもありしを子規ころろなしとはいかてしつゝき
- 1001 よひくりにこゑつゝの子規ねをこらすともかすはしれけり
- 1002 子規そなたになかはねつゝきに今もとひこん山もとのさと
- 1003 妻やなき山子規いつもくあと追【かけ】はさらに見なきに
トリ
- 1004 しはしにもいく川のせかわたるらむ山ほととぎす跡もおはれす
- 1005 やちりてくたけはかりになりにけりきのふ一日の花のしら雪
- 1006 イチヒトノ「き」イタチノマシ ヒマモ
さわかしくむれたる市に子規行方をみたる人もこそあれ
- 1007 をしけれとはるのころもとぬきすてつゝを夏にかふるしるゝに
- 1008 さとぎすむそのふのかきね春めきぬ我も垣根を行かよはや
- 1009 さむしとてそて巻むるかたはらにひらく軒はの玉椿哉
- 1010 このもとの風に吹るゝかたつふりいつなきからになれるなるらん
(四二・オ)「
- 1011 みわたせばそらにはきぬる雪もなし月かけよりや時雨ふるらむ

- 1012 いつこにかふりつき行おとほせてこのまにきゆるむらしくれ哉
- 1013 いつよりかそのはのみちちりはてゝかそへやすくもなれる柿のみ
- 1014 よくきけはさまくになくからす哉いかなるこゑかよるこひのこゑ
- 1015 いそのうへをはしりくゝてむらちとりとままる所なけにもある哉
- 1016 隅川のすききにはてし夕しくれ汀やけふのとまりなるらむ
- 1017 ことしけき十一月十二月とく過て俄に花の春へともかな
- 1018 のとかなる冬のみそらにかりかねも春待かねてゆくかとそみる
- 1019 見えねとも句来かにしるき哉垣のあなたやきくの花その
- 1020 いろなるもなくなりけり庭のおもにうすしこして拾紅葉
- 1021 夏もやゝ半になりて春花もいつの音にちれるなるらむ
 (四二・ウ)「
- 1022 庭のおもはえもはらはれすなりにけりもゆるおわかすもゆるおもひに

- 1023 梢よりさらにも落す山風に吹きめぐりきてちれるもみち葉
- 1024 月いつるそなたをみれはうめの花梅の花立枝のかけはねやに入まで
- 1025 鶯も羽うちふれて梅の花やけとやなきにけさのはつはる
- 1026 鶯のけさなきそひるこゑさへもまたかたなりのうめの初花
- 1027 なへてさく花うれしさに鶯の一所にもえやはあられぬ
- 1028 花により松によりきて行水もたゝますくにも流さりけり
- 1029 藤波の花さへ山を下りきて軒にかゝれる道のへのやと
- 1030 時鳥のおのかはかせにあらねともそら過行はさやく孤原
- 1031 浜千鳥おのかひかたのいろせなは飛立時そまかへるも見ゆ
- 1032 まれにたついその高波おとたえてそのまに鳴くは千鳥也けり
 (四三・オ)「

- 1033 夏衣けさぬるかふるひまにたにことしはきなくほととぎすかな
- 1034 藤波の花かけくゝる時鳥今こそ誰もそこを過しか
- 1035 野へ遠き一木の松に子規かけてもそこに行けしき哉
- 1036 よせくれはもの見車の轅にもましりて匂ふ秋はきのはな
- 1037 藤なみのいろのたくひと池よりも花合する杜若かな
- 1038 夏山のわかはのいろのふさわしく老たるいろも無子規
- 1039 をりさしてうち向ふより床のへにいつまでみたる白菊の花
- 1040 山にたにかくれはゆかて己から寒けたしき空の浮雲
- 1041 なにとなく人行かひて春めけは汀のかきりきたるうろくつ
- 1042 さわかしき林の音はとえしよもいとかすかにてのこるまつ風
- 1043 みとりなるけの筵のうちにしもなかいろみせにちれる紅葉
 (四三・ウ)「

- 1044 友とおもふともは此世にたえてなくわれたる硯一なりけり
- 1045 ひのくちの花はいくさもせぬものをあまたいたてを負すなる哉
- 1046 立並家のかはらのすちくもけさ見えきぬる春のしらゆき
- 1047 神無月のとかなるひははるめけは人くといふか鶯のこゑ
- 1048 鶯のこのまくゝりもふさはしく夕日さしたる霜月の空
- 1049 夕されはたかはのうへにふるあられかすかにおとの寒くも有哉
- 1050 まとのとのほとくとなる寒けさはこもりてねよといふかとそきく
- 1051 豊たにゆくうちあはぬ庵の内はまともる風の寒きのみかは
- 1052 庭のおもになかれもゆかす潦冬はとちたる氷なりけり
- 1053 ゆきふるか【ましらく】うめのこす多のをくらきにましらく見ゆる花計りして
 (四四・オ)「
- 1054 吹風にもてゆく花と見え乍うめのかれえにとまる白ゆき

- 1055 きのみまていけも平に見えにしか水のおもたかさきいてにけり
- 1056 老ぬれはゆきふる庭にいてもあへず引かへさるゝ埋火のもと
- 1057 埋火のもとにみよとの音ならむいづれは寒くさやくさゝ垣
- 1058 おのかとち寒き心をあはせても氷のうへをわたる川風
- 1059 へたてたる垣根おもはず内に外に風さへ吹はちる紅葉哉
- 1060 霜きえて朝月やとるけしき哉抄にわたすさをの一すち
- 1061 を山田の水に立ねの友鶴もさわき出たる朝日かけ哉
- 1062 鶯のうちはわきてや過つらむ花あらはれぬ雪の中つ枝
- 1063 わかやとの梢もはるはおとらしをよそまさりにも見ゆる花かな
- 1064 もとにゐて春をまつまもうらやすし日さへあたるまとの埋火
(四四・ウ)
- 1065 わかいほも神のいかきにゝたる哉しめ引はゆる春のはしめは
- 1066 けさはさは住かありとも見えぬらむ日かけさしたる松の間のま
- 1067 いつこよりたねさそひきて潦なかれしあとに生る春草
- 1068 わか多ひもまたこなくに入相の鐘にゆるるゝ花のさかつき
- 1069 風ふけはめには見えねとうめの花かさへちりかふさかりなるらむ
- 1070 冬こもるわか埋火のうへなれやのさはのゆきのけさはきえぬる
- 1071 ひま過る風のみさられて枝もなきもとさむけなる竹のむら立
- 1072 こゝに立かしこに立て市人もさむきにつとふ十一月のそら
- 1073 あたゝけきいちに入こはさしもあらし寒さにや急くのへの川水
- 1074 さわらひの生るをみればきゝすさへともにあるへき庭のおも哉
- 1075 埋火にかきいたきてもたらぬ哉今夜の寒さすへも無まで
(四五・オ)
- 1076 中々にゆめのまきれになりやらてまきにうき社世はうかれけれ

1077 かけにてはあらしかほなるけしきしていへうちこしに花の見ゆらむ

1078 水にうつるかけやいかにと見に行はそこに出てもくるさくら哉

1079 むかしよりもちつたへたる畠も田もうりくひむしはわか身也けり

1080 うたゝねのおの夢にも見えくれは花のゆめにもわれや見ゆらむ

1081 ユクヘナクウシナフヘクハ
いつこにかにけかくるとはなけれどもめもはなたれす守る月哉

1082 なにとなくのとかに見えて冬にてもまとにうつるは春日とそおもふ

1083 五月雨にもとゝすゑとは波こえてはしのなからの水に見ゆらむ

1084 こしをれて汀にたてるあしたにも【わか】おのすかたになれる冬かな

1085 あしかきにいまたのこれる朝兒のみを吹おとすこらしの風

1086 をかのうへのくさのみとりにまけしとて水よりも出る池のあしめ

(四五・ウ)

1087 わたつみのちひろのその多ひたにも月もろともにかぶよは哉

1088 ますますなる心をよそに見せかほに雲に立たる杉のむら立

1089 ほともなくかゝる芭蕉の身をしめて寒かりぬへき霜月の空

1090 なにこともほのくしくて老のみのいつよりゆめになるらん

1091 入かたのまとにさしたる夕日すら限はさたにさやかなる哉

1092 在明の月は半とかけたれと(になりたれと)傘はまとかにさしてける哉

1093 春の日にゆるへ過せるいかのをのあたゝけ過てねふるはかりそ

1094 山吹の花たに折てなくさまむいろこかねこそ手にも任せぬ

1095 としふれは家さへ人にひとしくて臥屋の戸口こほけなるかな

1096 いそきはにてらすひかけのゝとけさよ水を離て姿水鳥

1097 わかこころそひて行をもしらすして独めくれる水の浮島

- 1098 埋火のもとにありてもよきものを外にたちいてなくわらはかな
- 1099 薪にもとりつきかぬるこのはさへ皆とりにつしよはの山風
(四六・ウ) 一
- 1100 けさまたきおきいてかねし衾よりいつるくさめのいくたひとなき
- 1101 杜若へたてかましき名なれ共中わきて行水の月影
- 1102 ゆくせにはおこれかほなる月なれといそく水にはこころあはせず
- 1103 しもおける瓦の下をとくらにてなきいてかぬるけさのすゝめ哉
には
- 1104 ねさめかはよるはすからにまとうまでかねのかすよむ臥いほの中
- 1105 ところせきねやの神達ましませは朝をくらしと火を奉る
- 1106 雨はれてあらはれいつる時来はめもはなたれぬくものうちやま
古
- 1107 さやまめのうちゐたしきならひさまわかみのなりそくらへくるしき
- 1108 うゑかへはさまたかふへしうめのはなこなたよりきて庵をたてはや
- 1109 なにをしてなかずあるらむ鶯のなかぬまをしきうめのさかりに
(四六・ウ) 一
- 月 檜 山
- 1110 なにはかたしるしの山なくなりて平かならず見ゆるみ世かな
- 1111 いくたひかはしりとくまるいそちとりさも行かたくむかふあらしに
- 1112 中々に春のはしめの物なれやあらしくしかるさとの菌朶垣
- 1113 みちへの旅のつかれのまろひねにぬふれる人を照す月影
- 1114 にはのおもの風にまろへる蝸牛むなしきからのかるけなる哉
- 1115 さくらはなちりしくやとのさやけきにたげてもあゆむ庭鳥哉
- 1116 あらはにてむかへるよりもあはれ也まごしに見るうめの初花
- 1117 まつら川下せる船をおもしろみ竹こしにさへ見たるさと人
- 1118 むつましくおなしきはへにつとこもこころごとくにとふほたる哉

1119 霜にたにかれぬと見てし花のうちにみ冬は冬のきくそさきぬる

(四七・オ)

1120 さはの水さも波たつな杜若汀にぬるゝ花もこそあれ

1121 夕まくれちる花やみねかくなからよのまものにとあらむためかも

1122 あさけよりも静なる花さかりひるより風のたゝぬ日もかな

灌佛

ナケキテアリシマニ

1123 かくれます御歎のみ社歎しかまたうまれますすけふのみ仏

1124 生いつる庭のわかたけたけたかみおほつかなくもなよけなる哉

1125 かきりとかやみにちりくる夜さくらをさもさせしとや出る月影

1126 夕されはなかるゝ花も水のいろのあさきさくらに皆なりにけり

1127 船きしのをさゝかくれに在舟を見てかほにもちるさくらかな

1128 水もなく人も渚にちる花のかたよるゝころをかしとそ見る

1129 夕されはころも手白くちる花のいへに行まで袖そあれかし

1130 さらにちるゝちこそせめさくら花【水にかせの】やとれる【月のうへにうかひて

(四七・ウ)

1131 吹風に花ちりうかふわたし舟われものせてといてぬはかりに

1132 山おろし吹にのかれて旅人のそてにかゝるゝ岸の紅葉

1133 旅人のそひらにあたる夕日かけやとるさとまで送るはかりに

1134 けふもまたわつかになりて道のうへの夕日さひしき道芝の影

1135 ちりうする庭のこのはかたゝくに行へかなしくなるわかれ哉

1136 もえ乍すゝしきものはさはくさにすかる螢のほかけ也けり

1137 水かゝるみ冬のすゑになりぬれは川のうちにて川なかれけり

1138 もみちをはまろはしちらし庭のおもに独樂むこからの風

1139 こゝよしとけさより【けさし】めしこの根をありかへてみる夕くれの花

1140 日はくれぬ今はねはやといふまてはすかの長ねの及はるかは
（四八・オ）
1141 下さむく軒はの雨のおとするや雪ふりくへきさきおひのこゑ
1142 かれはてゝ見へくもあらぬ葛にもほれのこれる朝かほのたね
1143 かへる雁かへるくくと触れかほにわひしく鳴を聞旅人かな
1144 をちこちに飛めぐりきていつもくくとまれる斑鳩のさと
1145 出きぬとおもひもあへすいよすたれかゝけたらすも昇る月哉
1146 花をみる人にたくへてこし犬もかへるさしらぬ陰のうたゝね
1147 谷こしのそなたに見ゆる家をしもとなりかましくいへる山さと
1148 山さとの中々おほき家を見ていかてかよふとおもふ谷道
1149 そこも松爰もまつなる松山に木を切るおとは人けありけり
1150 立波にやかたも人もかくらむほ計見ゆる沖のとも船

1151 五月雨もやゝ晴かたになりつらむ水をいてくる谷の川はし
1152 鳥たにも夕けの時になりつらむこゑはしりたるむらすゝめかな
（四八・ウ）
1153 手にちかきさえたをさへに折かねてをしむ心のしるき梅哉
1154 をりつれてゑまひにしるく見ゆる哉われを恨ぬ花のころは
1155 うめかゝにそひてわかゆくなはてをはおのれも追てくる野風哉
1156 ふく風をとさまにやりて竹垣のもとかくれにもこもるうめかゝ
1157 都大路花はこなたにおかましをちりと一にやるあらしかな
1158 人のみかおのか身しらて鶯のなにをねらへるこのまなるなむ
1159 まつにうめうつろひかねてわかこくととなりありきの園の鶯
1160 鶯の籟をなくはかり行かひておりたすものはうめの花あや
1161 竹垣のうちにこもりて春風を外さまに過すそのうめかゝ

- 1162 春の風またのとけくも無物をさきいたちても匂ふうめかゝ
- 1163 ふき昇るみなとのあらしくけれと風にもつれぬ川のな引藻
- 1164 人しれすまさこの下に今もりてきてありぬへきつくくしかは
(四九・才)
- 1165 山寺のみちの長手のとほければ中々かねのこゑぞみしかき
- 1166 冬くれはこすゑのあらしあらひきてひよなき過るさとのやのむね
- 1167 何ことごとくは答す少女ともみなまていはてわらふなる哉
- 1168 潦水わづかに過るにはたにうちたれてきてさけるうめか枝
- 1169 さく花に立居ふるまひうれしさはおのれのみかで見ゆる鶯
- 1170 はるかにも影みえなからうち群てかすみのうへをかへるひよとり
- 1171 あまた人下るも見えてさき坂の下にやとかるたそかれのさと
- 1172 谷あひのみかたのさとのせまきにもいてくる月のおもひろけなる
- 1173 はかたへと帆をむけかへつやらかさきのこの尾はなを廻る友舟
- 1174 ほすゑにて三葉四葉を篠さゝもゆきにたわめるけさのあけほの
- 1175 あなたよりめつるのみかは梅かゝにこなたよりこそころしみけれ
- 1176 冬こもるまとのうちにも昏こしに庭の夕日のてれるをそしる
(四九・ウ)
- 1177 居並へる夕けの時にうちむれておのれもさわくにはすゝめかな
- 1178 けふもまたねやの机はひとりゐてはなれぬものは【ねや】埋火のもと
- 1179 花とへはまた外になし中垣の柱にゆへるうめの一木のみ
- 1180 われほめもきこくるしかるものなれとやとの桜にます花そなき
- 1181 わかやとに月も入きぬ子規さとはつれのみかよふへしやは
- 1182 くさのはの葉すゑにおける露の玉落てもよしと身をやさためし
- 1183 草の露水のあわともかそへきて今一なるあたものやなに

1184 雲かくれ山のは隠れ軒はにもかくれましやにしに月哉

1185 うたゝねの枕にかをる梅かゝはゆめのうちにもうつゝなりけり

1186 折々は月もこなたやみまほしき雲のひまよりのそくなる哉

1187 う治山のこのめつき木の花さかりめをつむよりは折てさゝはや

(五〇・オ)「

1188 かすくのかすみのうへのいかのほりたかいつこより引てあるらむ

1189 誰人かとりはなちたるものかほにあかるくくとなくひはりかな
タモトヨリ

1190 この朝けしつかにきけは遠方ははるになりたるうくひすのこゑ

1191 一本に三葉四葉のましのさへまねきかほにもなひく秋風

1192 はるなれや花はしりゆくみをもあはれはめぐりてはてぬちちもありけり

1193 誰もみな夕けの時になりにけりすゝめもあさる夕陰のには

1194 初はるはかみのいかきにことなうてしりしめ繩のいさきよきかな

1195 なかく今こそうめはましろけれやとのすみくらしなれと

1196 けふのひも今はかきりと夕付日花やかにさすにはのくれたけ
マト

1197 水のうへにちりぬるうめのくたけては一のこらぬもとの花形

1198 いつよりかきくらしつふりかねてくもおもけなるゆふたちの空

1199 ねやにもる雨のおとこそしつかなれ軒のしくればふりさわけども
(五〇・ウ)「

1200 皆人はみないこはせてたにまのゝはしをわたせるむらさめのそら

1201 かとすくる人のころもて雪ちりてとしの終のけしき立けり

1202 うめみれはそのふははるになりけり人のいへのみしはすにはして

1203 ことしけきとしの終は埋火の己独やあたゝまるらむ

1204 老ぬれはなす事なきかさひしくてせはしくもあるそうれしき

- 1205 なゝそちになるよとおもふうれしさに「こしは年の情けくもなし
- 1206 としのかすかそふるほどはたかかねとまたなゝそちの「こちこそせね
- 1207 いろつきし葉はみなちりて山柿の枝のみちは実に社ありけれ
- 1208 こころして堪てもあらめと長夜をうめの立枝にわたる山風
- 1209 夕まくれみ谷のそこや寒からし雲に飛入ひよどりのこゑ
- 1210 花おちてうちかさなれる深み草そらにちらねとけしきありけり
- 1211 冬のきてけしきそひゆく夕まくれやの棟こゆるひよどりのこゑ
 (五・オ)
- 1212 いつよりかぶゝめる軒の下椿うめよりもけに早さきにけり
- 1213 のとかなるひにもいてこて垣内のはやかたまれるにはたゞきかな
- 1214 ゆきの内に花さき出るうめをみてわか身やさしき埋火のもと
- 1215 さくらはなうかれく〜てちる比は風もたのしく吹けしきかな

- 1216 いくたひかゝとうち過て平ならすそよかへりくる妹かくつ音
- 1217 ちまち田のおほろ月夜に立鶴の影のとかなる夕くれの空
- 1218 しはしあはれさはかりもなき寒さにもえもおきかぬる霜の朝と
- 1219 さくらさくみねを飛行しらくものこころなしにて山をいでめや^田
- 1220 をかのうへにけふはいてきておもふとちめを心にも任せつるかな
- 1221 水のこゑやゝきいてゝうれしきは【花や】谷まの水とけし也けり^{クル}
- 1222 よの中にちりもわか身もかはらねはこゝめらるへき理そかし
- 1223 なにこゝそさしてのいその底たゞきたゞき乍やもの見かほなる
- 1224 かけ乍猶のこりたる硯こそ半しにたるわか身なりけれ
 (五・ウ)
- 1225 鶯の仰乍に見るかたやわれもさくへくおもふうめか枝

- 1226 わかまたるうめさいまたさかすしていつかたばらむとしのもち飯
(五二・オ)
- 1227 行としのくれさむけなるさひしさをさきて補ふ軒のうめかゝ
- 1228 こころなき花なればこそ皆人のひたおもてにもほめにほめけれ
- 1229 山さとはしはすのはてになりつらむとしの尾越のひよとりのこゑ
- 1230 花さけはさへなくねのおもしろみ冬にははれる春のひよとり
- 1231 いつまでもふとめるうめのさひしきにもとにほへるあから立花
- 1232 瀧のおとに春きにけりとおとろけは汀のうめもほころひにけり
- 1233 うめたにもおとろきさける瀧のおとを我のみ春をしるかとおもひし
- 1234 瀧の音のいと大いなきゆるは遠き郷まで春やつくらむ
- 1235 かせふけは風にもまろふ蝸牛いつなきからになれるなるらむ
- 1236 水せまき壺のうちにもうめの花いつ影うつす一枝なるらむ
- 1237 中々にとこ離るゝやよろしきとしひても起る霜のあかつき
山田屋順之助かみまかりけるにつかはしける
- 1238 よすからのしもにふちとる草のはの【寒さ】^しもいとしるき此朝けかな
- 1239 老のみはこよひもしもの庭あたけにさす夕日かな
- 1240 あらをか手をあはせてもいたくへき松にもすめる鶯のこゑ
- 1241 鶯もすかりすめるやおもしろき風に乱るゝあをやきのいと
- 1242 くもより俄におつる夕ひはりすこもる子をや思いつらむ^マ
- 1243 ちはらより俄にたちてなくひはりすたてる子社そらに呼らし
- 1244 川のおもに夕日さす也わたし船わたせる人もあかきはかりに
- 1245 かすゝにのころつほみを頼にてやすくも落る玉つはき哉
- 1246 わらはへのそてをひろけてまつまにもおちかゝるへき玉椿哉
- 1247 きの山のそなたや春になりぬらむ年のをこしのひよとりのこゑ

このうたをもたせてつかはすとか

(五二・ウ)

1248 霜きえて露のころの置所則はすのうてな也けり
(ミタマ)

徳宗志里子の一周忌に

1249 わかれてはまた立帰る時もなし天の日にたに【立帰ら】はや
メクリアハ

1250 かはかりの蒼のかすに梅花一花さかていくか見すらむ

1251 灯してこすゑをみはやさくらはな人にしらす独多むかと

1252 さと中もくらくなりきて山のはをたゞには見ねとをしき月影

1253 山人も花はきらしと思へともころもとなき斧の音かな

1254 おのれから移ふころになりぬるを折取ちると見ゆる花哉

1255 いつのまに垣まをこして春の水うめかけうつるにはきつらむ

1256 むかしより垣の境もなかりけりとなりの松そわかやとの松

1257 皆人にさかはやらむと契置て一枝もをらぬ花さかり哉

1258 おもはずも早きとし哉桃たにも三月三日にはあふくもなく

1259 埋火にねふれるまにや降雪の雨になりぬる夕くれの空

(五三・オ)

1260 たのしらにもろ手のもたる親子狙そのこのみこそこのましけなれ

1261 道のへにはらからめきて土筆長きみしかき立ならふなる

1262 すかりゐて花の芯はむひよとりにやかても落る野椿のはな

1263 芭蕉のはひろはやこに寒からむ身をせはめたるけさの秋風

1264 無人のこのみなりつる丹波栗少け乍奉らはや

1265 見つゝのみ立たる人も折ぬへし手ちかくもよる青やきのいと

1266 青柳のいとけしきをやくそへ己もなひくかけの駒の毛

1267 武士のちからかましきたもとは中々をらし青柳のいと

1268 あらためてなかれそめつと見ゆる哉春の始めの谷のわか水

1269 山のはにかくるゝ時は入月もさらはといへる（こちこそすれ

1270 かしらしてまねく鳥のこゑはいてす友ほしけなる夕くれの空

1271 いつよりかそらなる月はやとるらむたかふたとりし水瓶の中

1272 ゆきふれはうれしかほなるゑせいぬの己か跡つくにはゝしらすて

（五三・ウ）

1273 はるくれはわかなわか水けしき相て川へのやとのなつかしきかな

1274 池のうへにかつちりうきてさくらはなななかれぬ水のくちをしき哉

1275 月かけは爰までさへに入ものを昏の一重にとむるまどかな

1276 なくたひに遠さかり行き規ちかつくゝゑに引かへしてよ

1277 をかのへの松一もとを庭木にていくらの庵か並ぶ今さと

岡半三郎 養子□ きたりける時竹の子にそへて

1278 今よりはをかのたかむら君しめて生る子毎にちよはたかはし

滞花

1279 見つゝクルツミノ人トモロ共ニトマリテユカヌ キシクヒノハナ【ゆく】人さへしはしとゝむなり花滞る川の岸杭

暮春

1280 はるくれてさひしきけふはちる花も隣にたにと行けしきかな

山吹

1281 をりさせるたゝ一枝も川きしにさくすかたなる山吹のはな

山彦

1282 【かたりあひて谷路を過る】こゑをさへまねひかほにもとよむ山彦

暮春

1283 ゆくはるをとほくもおはてこの元にちれるさくらのつかねをそ見る

（五四・オ）

1284 ころろなく水に任てなかれ行川せは花のゆめち也けり

1285 夕くれもいそきめくらぬ水車よるひるなしの水に任て

- 1286 見つゝゆく堤の人ともろともに己もとまるきしくひの花
(五四・ウ)
- 1287 五月雨もけふはまことにはれぬ也ひてり雨ふる山もとのさと
- 1288 夏山のてらはまひろしあつしとて身にたへかたき日はなかりけり
- 1289 何人にあふちのかけそすゝしくて花ちりしきてまちかほにする
- 1290 よひ／＼のけふりにむする郷中にいつまでたくそむろの木積は
- 1291 翁ふることもなくして山松のおのつからなるすかたかなしき
- 1292 とし／＼におなしさまには立乍ことさらひたるにはのわかたけ
- 1293 そこよりと行たるもなく今朝見れば山はのこらすかすみきにけり
- 1294 うくひすのけさはつこゑのうれしきにまちかきにさへおとろかれけり
- 1295 臥いほのところせけなる入口にとろせけなし桐の一葉哉
- 1296 花にゐてねふるさまなるこてふかなゆめかとみつるなてしこのはな
- 1297 風ふきてよりつきかたきこてふかな花さへなひくにはのさゆりは
- 1308 にはとりのいつもおやこのとちあそひかきみたりる花紅葉哉
- 1307 夏くれは水なつかしきはしめとて花もそへたるかきつはたかな
- 1306 おのれから思ふ所にいつも／＼くものそひたる夏山のみね
- 1305 夕くれの入日に見れば【やゝとほく】おきまで引るいそのしまかけ
- 1304 はるの水いかのとかになりつらむおもけにめくる水くるまかな
- 1303 誰ならむあらし／＼てすみすてしあとに盛の夕かほのはな
- 1302 こゑはかりきけはやみなき子規行へたつねすあるへかりけり
- 1301 たかくのひてすかたかましきけしの花早くちるこそおのか痕なれ
- 1300 雨になるくものけしきをしりかほにいそくなはての子規かな
- 1299 行こまのすゝふりたてゝ追行とあとかへり見ぬほとゝきす哉
- 1298 さま／＼にいろかはれとも誰か見む人なきてらにさけるあちさる

1309 はる秋のすきはひしれぬ小家にも一木はもたる軒の花かな

1310 こゑなしにかきねにきゐる鶯の今はとほるをおもひすてけむ

1311 はるの花さきたるおなしころもてわかはにしける夏木立かな
(五五・オ)

「

1312 竹のはのしけき中にも月かけのかけぬすかたは見ゆるよはかな

1313 すゝしさに月をみるとか夕まくれ枕なけこむ川そひの舟

1314 たゝにゆく人も見ゆれとてる月のもそろくゝにわたる川【舟】
はし

1315 いつのよもころの外に更にけりこはてる月のしわさ也けり

1316 すゝしやおもふ迄こそすゝしけれ今はねふたさかきり無哉

1317 水音に川かぜましるすゝしさをいかてつゝみてねやに入南

1318 一むらのくもにこめたるすゝしさを【くも】
はや
【早く】
よそに
やるあらし哉

1319 あすよりはけにすゝしくもなるらめと夏のかきりの夕くれのかせ

1320 村雨はころありてもふりこかしちりをかつけるなてしこの花

1321 雨ふらは風もすゝしくいらましをあつさにふさくまつのまのまと

1322 いねかねてかたるこゑするよなかなとなりもおなしよはの暑さに

1323 やねこしに入【舟】
クル
見えて舟のほのいくつとなしや深川のさと

1324 あさちはらすゝしき風に任せては人のかとまで払ふ夕【風】
くれ

(五五・ウ)

「

1325 うゑ木うる夕くれ方のいち人もすゝみかてらの夕まくれかな

1326 うるといはいかなる人かゝはさらむこけのしみつも庭にありけり

1327 夏のゝ草木しなふる道のへにあつさもしらすゝむしみつかな

1328 みちのへのしみつかもとに人むれてあさちかうへの脱すてのかさ

1329 よあくればましろになれるくものみねあかつきのみの山にそありける

1330 なみくらのと【を】^{ここに}【あけは】^て【かりの】市にたに夕風入る【なには】^{ゆふまくれ}への

市哉

1331 みちのへに乱生たる松たにもならへはものゝ清けなる哉

1332 おのかしはちきものけす【みちのへ】^{このもと}のひちにまみるゝ萩の下枝

1333 花ちればあけはなちたる門をさへ人も入こぬみちのへのいほ

1334 くものみね一木の松のそなたより人しれぬまに立そつかへる

1335 見わたせば雨はれそむる白くものそほしりたるのへの夏川

1336 わかゝとにありかをひろくとるものはさまいとたるゝ柳也けり
(五六・才)

1337 老ほれて半しにたるはたにたに蚊遣いとひてけふり立けり

1338 すゝしさも今はおほえて川きしに舟まつ人の見るあふちかな

1339 なつなつみせりつみ行つくゝしなれもともといひかほに立

1340 はるかなるすさきに立てみをつくし【そら】^風長閑なる二月のそら

1341 むらからすいつれか子ともわかねともはまするゑにそ親は見えける

1342 すかりてもあるかとみれはなくせみの所かへこそうたてしけれ

1343 朝々のへあらたなる朝かすみはらへるそらと誰も見るまで

1344 たかむらのすくなるうちに見くらへてわたる間こそいとめたちけれ

1345 このもとはいまたひるなるさくら哉人かへりてやよるになるなる

1346 こゝよりやさして行へきわかやとの花よりつくをちの遠山

1347 風ふけはまねきゝてみちのへに夫のみおのかわさすゝき哉

1348 われさへにきかすとすれと春のよのみしかよ乍ねこのよあかし

- 1349 行かたに過よみそらの子規わかめのまへをとひかふへは
- 1350 人ゆけははしりにけたるあしかにの過れはあとにまたいてぬへし
- 1351 わかけれはもの速かにはにひしころもにふき老のはてかな
(五七・オ) 一
- 1352 かれく／＼の路にふしたる枯尾花月にはなることもしらすて
- 1353 民の家の麦かりほせるさと中に螢見にとて人そきませる
- 1354 行かよふわらはもをらてさと中にあちさいさける竹ひさし哉
- 1355 ほととぎすわすれてもあし夏山のわかはやはらに生しけるころ
- 1356 市中のしなけもなしのうりかひをやはらけてなくほととぎす哉
- 1357 よの人の下やすからぬころをは水鳥のみとおもひける哉
- 1358 きけや人むかしまれなる齡してしぬへくおもふ時こそありけれ
- 1359 老ぬれはなれしきかつきはにふれてみつのともなき一つたになし
- 1360 のとかなるけしきのうちそめつらしく山やくけしき見ゆる夕くれ
- 1361 ほととぎすまつやとらむならひたるわかはのかけの数のわらくつ
- 1362 てる月のかけはいつこもてるものを独さひしく見ゆるそらかな
(五七・オ) 一
- 1363 けさのたちあなちになりぬころちよくみねのわかはぬれく／＼にして
- 1364 暮山花 十三回
皆人のさらはと立もすかたのみ帰ると見ゆる花の夕陰
- 1365 なにとなく君おもひいて夕くれの山路の花にしのお比哉
- 1366 過るもの皆なつかしなどほさかる一村くもはむかしならねと
- 七十賀
- 1367 みしかよにねこのよありきかしましく人さへねせぬ夏のこのころ
- 1368 世の中をすてはあれとねふたくてゐてもえあらぬ六月のころ
- 1369 あるしする人には何もいはすしてまつ見る軒の家さくらかな

- 1370 口ひらくたくれからすあつき日はねにかへるまもそらやくるしき
- 1371 かへるきになりてめにつく土筆尋し野にはなか／＼になく
- 1372 大路行ころもかけになりはて夕日に向ふ夏のくれかた
- 1373 秋くさのころ／＼にさきしより道をまけても行野中かな
- 1374 世の中をころのまゝに行ものは野への川せのしみつ也けり
 (五七・ウ)
- 1375 秋ふかくなり行まゝに見わたしの皆山さとは枯尾花して
- 1376 川舟のもそろ／＼に北吹てけふはすしと誰もいふなり
- 1377 さきぬれはうけかゝになる山さとは小いへ毎にも入て見る哉
- 1378 くれ行はくれ行けしきまたことにさひしき増る秋雨哉
- 1379 くらやみにやすくもいそく子規なくねのことやめさへさやけき
- 1380 うらさとのけしきははりてあしのはにたえ／＼見ゆる夏はきにけり
- 1381 をり／＼にうこくやみぬる青柳は長きはるひにねふる也けり
- 1382 まさやかにすかた見せぬる富士のねのけふや夏立はしめなるらん
- 1383 すゝめに子おやにかはらすなりぬれとまたしきすかた猶のこりけり
- 1384 をちこちの人のつとひか朝夕にまとよりをちの見ゆるをちかた
- 1385 汐みくさふかくそめにし心にやちれとも花の手折かてなる
- 1386 夏くれはこたちわけゆく旅人の袖のまに／＼なるわらはかな
- 1387 花のみねさやに見えきぬわかかさの雨のしたよりやむをまつまに
 (五八・オ)
- 1388 大そらのくもの行きにめをやりてをしむさくらをよそにする哉
- 1389 ひさにもる月にちりくるさくらはないつれもうとくそむけるはなし
- 1390 このもとに
 花かけにしはしとむる少女さへ花のつかひにことならぬ哉

1391 人のきくこともおもはてなくかはすけにむるゝ夕くれのそら

「天理図書館蔵」印

（五八・ウ）

1392 にはたつみなかるはかりの小流にわきて覆へる山吹のはな

1393 花にもいはむとおもへはいひかねてともにゑまるゝにはさくら哉

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。

1394 あらかきのちまとせはむる萩の花さかりは人のこぬもよしとか

ここに深甚の謝意を表する次第である。（凡例は、46号参照。）

1395 かりさりてしはしはさむしをたの月かたみにむかふよは斗して

（しんとう やすこ）九州情報大学非常勤講師

1396 花はかりうとき隣をしりくゝてにしに東にゆける枝哉

1397 大かたはねたるかほにてさく花にねふるもあらすめたる蝶かな

1398 立さらはふまゝしものをあさちはらあまりにちかくあゝひはり哉

1399 ふすほりておくくらけなる仏にもさやに匂ふ花の枝哉

1400 きくの花皆一時にさかすともかつくふみひろく見せなむ

1401 山鳩のたゝつかひ枝にゐてさひしかほなる秋の夕くれ